様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 ２４ 日現在

機関番号：３３９１７
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５３７０２４５

研究課題名（和文）『蒙求和歌』に見る漢文学と和文学の融合

研究課題名（英文）The blending of Chinese and Japanese literature in Mougyu-waka

研究代表者
森田　貴之（MORITA, Takayuki）

南山大学・人文学部・准教授

研究者番号：９０６１１５９１

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,200,000円

研究成果の概要（和文）：源光行『蒙求和歌』の未翻刻伝本の公刊を果たすとともに、その基本的性格を明らかにし、一部の伝本に依存してきた『蒙求和歌』研究の環境を大きく改善した。また、同一故事の受容方法を他作品と比較することで文学史的な位置づけを試みたほか、和歌文学的見地からは新古今時代歌人としての源光行の和歌表現の特質を明らかにし、２種類ある本作品の成立過程については文体的特徴の比較という国語学的手法を用いて検討を行った。

研究成果の概要（英文）：Our research group published for the first time several parts of Minamotono Mituyuki's Mougyu-waka which have not been printed before, thus providing a wider field for research on Mougyu-Waka. This research reevaluated the work's place in literature history by comparing to other literary works the form of the Chinese anecdotes found within.
The poetic expression of Minamotono Mituyuki as a poet of the Shin-kokin-period was also explored from the standpoint of Waka literature research. A comparison of the literary styles of the two versions of this work was carried out, pointing to the conclusion that the katakana version was produced earlier than the hiragana version.

研究分野：和漢比較文学

キーワード：中世文学　和歌文学　和漢比較文学

１．研究開始当初の背景

日本文学が中国文学を常に受容し続け、その影響下にあったことは言うまでもないが、近年の和漢比較文学研究は、単なる中国文学受容の問題から、受容された中国文学が日本の文学とどのように融合し、発展させられてきたのかということが大きなテーマとなってきている。

中国の故事集として日本でも広く流布した『蒙求』のなかから故事を選び、翻訳し、関連する和歌を付す、という形態の作品である源光行『蒙求和歌』もまた、中国故事と日本文学とが融合せしめられた文学作品の一である。

この『蒙求和歌』は、延慶本『平家物語』、『雲玉和歌抄』、『徒然草』などに利用されており、中世の『蒙求』受容に果たした役割は非常に大きい。しかし、それに反して、『蒙求和歌』そのものの研究は進展しているとは言いがたかった。漢学を藤原孝範に学び、和歌を藤原俊成に学んだとされる作者源光行は後に、源氏注釈・河内本源氏物語本文の作成という文学史上の大業績を残すことになる。その初期の作品といえる『蒙求和歌』について、その和歌史的、文学史的位置づけを行う必要があった。

また『蒙求和歌』の諸本は、第一類本（平仮名本）・第二類本（片仮名本）・第三類本（第一類本と第二類本の混態本）に分かれるが、第一類本（平仮名本）・第二類本（片仮名本）については、その先後の関係も未だ確定してはおらず、二種の『蒙求和歌』が残された理由もまだわかっていない。これら未解決の疑問にアプローチしていく必要があるが、そのための基本的資料が未整備のまま残されていた。

たとえば、上述の第三類本は、明らかな後出の混態本であるが、第三類本独自の本文を持ち、現存の第一類本・第二類本の本文を見直すうえで軽視できないものである。しかし、その翻刻すらなされていなかった。また、第二類本についても、第一種～三種まで異なる三種類の本文があることが知られるが、第二種・第三種本についてはその本文が紹介されていなかった。

こうした基本的資料が未整備である現状が作品研究の大きな障害となっており、資料整備も含めて、基礎的作品研究がなされることが求められていた。

２．研究の目的

「『蒙求和歌』に見る漢文学と和文学の融合」と題する本研究は、源光行『蒙求和歌』を対象とし、源光行が、中国文学に由来する故事を、どのような文学的環境において受容し、どのような〝日本文学〟として再生産したのかを究明することを目的とする。

具体的には、未解明である片仮名本（第Ⅱ類本）・平仮名本（第Ⅰ類本）の相互関係を把握するため、本文の紹介すら行われていない伝本類について本文・校異の作成などの基礎的資料整備を進めつつ、和歌文学・国語学・和漢比較文学という複数の視点から『蒙求和歌』を捉え、和漢融合文学の一つとして位置づけられる『蒙求和歌』を通して、東アジアの文学交流の一端を見ていくことを目的とする。詳細な目的としては、以下の(1)～(4)がある。

(1)諸本研究の進展

『蒙求和歌』の諸本研究は、池田利夫氏のすぐれた業績があり、基本的な系統分類はすでになされていた。

それによれば欠脱箇所の多い第二類本（片仮名本）に対して、七巻残欠本である第二類本（片仮名本）第二種本、その和歌抜書本である第三種本には、第一種本に見られない和歌があることが指摘されていたほか、第一類本と第二種本の混態本である第三類本にも、現存の第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）に見られない章段本文や和歌があることがすでに指摘されていた。

しかし、『蒙求和歌』の研究、利用に際しては、『蒙求和歌』研究は、『新編国歌大観』に掲載されていた第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）第一種本のみに依存していた。これは、先に述べた欠脱を補いうる可能性が高い伝本類が依然未紹介だったことによると考えられる。

第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）の先後を問うことは『蒙求和歌』研究の主要な研究課題であるが、こうした欠脱を含む伝本のみに依存していては十分な考察を行うことはできない。そこで、『蒙求和歌』の主要伝本の本文をすべて整備することで、『蒙求和歌』研究の新たな基盤を構築することが目的の一つである。

(2)和歌文学史上への位置づけ

『蒙求和歌』は、『蒙求』故事に対して和歌を付したものである。しかし、その和歌を対象とする論考は乏しい。『蒙求和歌』全十四巻は、勅撰集に類する部立を持ち、四季部においては堀河百首に近い歌題によって整序されている。したがって、『蒙求和歌』は、『蒙求』故事を翻訳するという目的のみならず、そこに故事題詠歌を付すというところに大きな目的があったことは明白であろう。つまり、『蒙求和歌』の作品研究において和歌部分は故事部分と同等以上に重要であるはずだが、これまでの『蒙求和歌』研究は同時代の和歌文学作品のなかに位置づけるという作業をほとんど行っては来なかった。

俊成に和歌を学んだという源光行が、どのような詠歌意識によって、どのような表現を和歌に用いているのか、などについて、同じく源光行の手になる『百詠和歌』も対象に含めつつ、同時代史的視点から位置づけを試み

ることで、説話文学的作品として扱われがちであった『蒙求和歌』研究にあらたな視点を提供する。

(3)国語資料としての『蒙求和歌』
　ある作品の特徴を捉える上でその言語表現の特徴を調査することは重要な指標であると考えられるが、『蒙求和歌』を国語学的視点から捉えた研究は今までになかった。第一類本（平仮名本）、第二類本（片仮名本）の性格やその先後を考察するにあたり、国語学的な考察は有効なのではないか。
　さらに同一者の手によって、同一の内容が片仮名と平仮名とでかき分けられている、という点で、『蒙求和歌』は、当時の文体選択意識をうかがわせる資料としても有効性が期待できる。

(4)『蒙求和歌』の学問的環境
　鎌倉期には、源光行『蒙求和歌』『百詠和歌』のみならず、菅原為長『仮名貞観政要』、藤原茂範『唐鏡』といった一連の漢籍翻訳作品群が作られた。また前時代の『唐物語』も同種の作品であるほか、『蒙求』由来の中国故事を多く含むことから説話集『十訓抄』や軍記物語なども関連作品としてあげることができる。
　これらの関連作品のなかでの中国文学受容の形態を比較しつつ『蒙求和歌』を文学史上に位置づけることで、源光行周辺の学問史的環境を具体的に明らかにすることを目指す。

　以上、本研究の目的は、第一に基礎的資料の整備が不十分な『蒙求和歌』の研究環境を一変することを目指しており、それが最も大きな意義である。さらに本研究は、そうして整備された、計三類五種ある本文のすべてを視野に入れたものであり、活字本に依存してきた蒙求和歌研究の進展を企図している。
　和漢比較文学・国語学・和歌文学など異なる分野で研究を行ってきたメンバーにより、多角的に『蒙求和歌』を捉える本研究の狙いもそこにある。『蒙求和歌』という一つの作品を対象とした研究ではあるが、単なる和漢比較の方法に基づく研究とは異なり、日本中世の知識人の思想・発想を具体的に解明する成果が目指すものである。

３．研究の方法

　『蒙求和歌』研究を行うに際して、次の研究課題(1)～(4)を設定し、その解明に取り組んだ。なお、(1)基礎的研究については、研究代表者、研究分担者、研究協力者全員で取り組むこととし、(2)～(4)の各個別研究課題については、それぞれ代表者、分担者一名が責任者として取り組みながら、年間数回実施した研究検討会議において研究メンバー全員で討議を行い、問題意識を共有しながらすすめた。

(1)基礎的研究
　主に基礎的資料の整備を行うことを目的とし、主要伝本系統の網羅的な紹介を行う。例えば、本文が未紹介第Ⅲ類本は、混態本として退けられ、その価値が低く評価されてきたが、第Ⅰ類本・第Ⅱ類本の本文を再検討する上で軽視できず、その本文の翻刻・紹介を行う。
　同様に、第一種～第三種に分けられる第二類本のうち、既紹介の第一種本に欠けている第二種本、第三種本の諸本を整理し、その本文の翻刻・紹介を行う。

(2)和歌文学としての『蒙求和歌』
　『蒙求和歌』は、『蒙求』故事に対して和歌を付したものである。しかし、故事受容の例として本文部分が比較的よく取り上げられてきたのに対して、和歌部分を視野に入れた論考は乏しい。四季部だけを見ても伝統的な百首題から、題を選び百首歌として構成するなど、和歌への意識は高い。同時代歌人や歌論との比較などから、新古今歌人としての源光行の詠歌姿勢を問う。

(3)国語学的視点からの『蒙求和歌』研究
　『蒙求和歌』は、同一作者によって片仮名本、平仮名本の二種類の本文が作られたと考えられている。そして、その二種類の本文には少なくない異同がある。したがって、『蒙求和歌』は、日本語の平仮名文、片仮名文がどのような意識によって使い分けられているか、文体的にどのような特徴を持つのか、について考える際の具体例としてふさわしい。国語学資料としての『蒙求和歌』の可能性を検討していく。

(4)『蒙求和歌』の学問的環境
　京―鎌倉間を幾度も往来し、公家・武家双方との交流があった。光行の学問環境を知ることは中世の学問環境を知るに欠かせない。同時代の作品の中国文学受容の様相と『蒙求和歌』のそれとを比較することで、中世の学問史の中に『蒙求和歌』を位置づける。具体的には同一の事象（人物・故事）が通時的に日本においてどのように受容されたのか、その視点を固定することで、中国文学受容の様相を調査していく。

４．研究成果

「３．研究の方法」で示した研究課題(1)～(4)について、研究を進めた結果、それぞれ以下の成果を得た。

(1)基礎的研究
　基礎的資料の整備に関する成果として、いままで本文の提供がなされていなかった『蒙

求和歌』第一類本（片仮名本）第二種本および同第三種本の本文を翻刻し、紹介した。
　そのうち、『蒙求和歌』第一類本（片仮名本）第二種本は、江戸時代までの流布本的位置にあった本文であり、第一種本より多くの和歌を持つことがわかっていたが、未だ本文が紹介されていなかった。
　もっとも残存数の多い素庵本系統に属する伝本である早稲田本を底本とし、広島大学との対校を示した。広島大学本を対校本としたのは、同本が、存在が指摘されながら所在不明であった宝永本系統の本文を持つことが確認できたためで、これにより第二類本第二種本系統の主要な本文をすべて示すことができた。
　また、『蒙求和歌』第一類本（片仮名本）第二種本からの和歌抜き書き本である同第三種本についても伝本調査を行い、第二種本素庵本系統との関係が濃厚な内閣文庫本を翻刻・紹介した。
　さらに、第三類本（混態本）の本文を翻刻し、紹介を行った。第三類本は、第一類本（平仮名本）・第二類本（片仮名本）の混態本と位置づけられ、原態から遠ざかった本文を有するものとして諸本研究の中で退けられがちであった。しかし、第三類本のみの独自本文や独自和歌を含み、『蒙求和歌』研究に資するところが非常に大きいことから、その主要伝本との校異を含めた公刊を果たした。
　同時に『蒙求和歌』第三類本について、その基本的性格を検討し、両本が混態される過程において用いられた伝本はかなり良質ものであり、現存の片仮名本・平仮名本に欠脱を補いうるものであることを明らかにした。ただし、一部には第三類本特有の増補も見られることを併せて指摘した。

(2)和歌文学としての『蒙求和歌』
　『蒙求和歌』のみならず、同じ源光行の著作である『百詠和歌』を対象に含めて、源光行の和歌表現を検討し、『蒙求和歌』『百詠和歌』の和歌表現に新古今的表現が頻出すること、さらに、光行の『源氏物語』研究の師である藤原俊成の影響が濃く認められることを指摘した。この研究により、漢詩和歌化という特殊性ゆえに見落とされてきた『蒙求和歌』『百詠和歌』を同時代の中に位置づけること、また光行の文学的形成を考える糸口を得ることが出来た。

(3)国語学的視点からの『蒙求和歌』研究
　問題にされることの多かった『蒙求和歌』片仮名本・平仮名本の先後について、説話部分の文体から考察した。特に重視したのは漢文訓読的要素の軽重である。「イハク…トイヘリ」という呼応や、係助詞ナムの使用などについて、その分布や両系統間の相違を通じて検討すると、二類本に訓読文的傾向が強いのに比して、一類本は和文的色彩が濃いことが明らかになった。このことに加え、『蒙求和歌』が漢籍の『蒙求』に基づいて成立しているという事実を考え合わせ、訓読文的な二類本が先に成立し、それを改編して和文的な一類本ができたのだと結論づけた。

(4)『蒙求和歌』の学問的環境
　中国史上唯一の女帝である則天武后という人物が日本の中世文学にどのように受容されたのかという点について調査した。その結果、「二代の后」「還俗した皇帝」「密通した后」という側面に注目が当たる一方で、真名本『曾我物語』、延慶本『平家物語』などでは女性為政者として好意的に捉えている作品もあることが判明した。真名本『曾我』は、則天武后を北条政子の先例であると位置づけている。『蒙求和歌』が冒頭に漢祖竜顔に配置し、呂后を北条政子の先例であると位置づけていることと類似することもあわせて触れた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計 7 件）
「『蒙求和歌』『百詠和歌』の表現―歌人としての源光行―」、<u>小山順子</u>、『京都大学国文学論叢』、単著、査読有、第 35 号、1-21 頁、2016 年

「『蒙求和歌』第三類本の性格―解題にかえて―」、<u>森田貴之</u>、『京都大学国文学論叢』、単著、査読有、第 35 号、23-45 頁、2016 年

「『蒙求和歌』の改訂と文体」、<u>蔦清行</u>、『日本語・日本文化』、単著、査読有、第 43 号、83(1)-52(30)、2016 年

「『蒙求和歌』片仮名本（第二類本）第二種本　本文」、<u>森田貴之</u>他、『京都大学国文学論叢』、共著、査読有、第 34 号、39-114 頁、2015 年

「片仮名本『蒙求和歌』第二種・三種本の研究 ： 付 第三種本 翻刻と略異同」、<u>森田貴之</u>、『アカデミア 文学・語学編』、単著、査読無、第 97 号、260-302 頁、2015 年

「『蒙求和歌』第三類本 本文〈三〉―哀傷部から雑部―」、<u>森田貴之</u>他、『京都大学国文学論叢』、共著、査読有、第 31 号、49-87 頁、2014 年

「女主、昌なり―日本中世における則天武后像の展開―」、<u>森田貴之</u>、『論集中世・近世説話と説話集』（和泉書院）、単著、査読無、123-149 頁、2014 年

６．研究組織
(1)研究代表者

森田　貴之（MORITA, Takayuki）
南山大学・人文学部・准教授
研究者番号：90611591

(2)研究分担者
小山　順子（KOYAMA, Junko）
国文学研究資料館・研究部・准教授
研究者番号：20454796

蔦　清行（TSUTA, Kiyoyuki）
大阪大学・日本語日本文化教育センター・
准教授
研究者番号：20452477

(3)研究協力者
阿尾　あすか（AO, Asuka）
濵中　祐子（HAMANAKA, Yuko）
中村　真理（NAKAMURA, Mari）
竹島　一希（TAKESHIMA, Kazuki）
山中　延之（YAMANAKA, Nobuyuki）
南谷　静香（NANYA, Shizuka）